

岩崎俊夫先生の人と学問

鈴木雄大

岩崎俊夫先生は2016年3月をもって立教大学経済学部を定年退職されました。先生は1991年4月に立教大学経済学部へ赴任され、以来25年間にわたり、研究、教育、学内行政に尽力されました。先生のこれらのご功績は本紀要末に収録されている「岩崎俊夫教授の略歴および業績」にあるとおりですが、これまでの研究活動、教育等について、先生宛の私信の形で「岩崎俊夫先生の人と学問」を記したいと思います。(2016年11月記)

岩崎俊夫先生

今年も長く続いた残暑がようやく終わり、過ごしやすい季節となりました。2016年も残すところ1月半ほどとなりましたが、先生におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。紅葉前線が南下し、平地でも木々の葉が色づき始め、北海道や東北地方からは降雪の知らせが届いています。大学の正門にある2本のヒマラヤ杉には例年通りイルミネーションが施されています。大学の本館のツタも鮮やかな緑色ではなくなりましたが、来年度の新入生を迎える準備に入っているようです。

私は本年4月から、立教大学経済学部助教として着任いたしました。気が付けば秋学期もすでに折り返しを迎え、時の経過の速さを痛感しています。

先生に初めてお会いしたのは、私が立教大学経済学部経済政策学科に入学した2007年の「統計学」の講義でした。「統計学」の講義は本年度から自動登録科目となりましたが、当時は「共通選択科目1」の「科目コード登録科目」であったと記憶しています。現在では、「統計学」の講義は学生1人につき1台のPCを利用できる環境が整えられていますが、当時は4号館の4階でPCを利用せずに講義が行われていました。学部2年次からは「経済統計ゼミナール」へ参加させていただき、大学院博士課程前期課程、同後期課程に至るまで7年間、また、大学院単位取得退学後も学会や研究会等を通じてご指導いただきました。ここで、先生との思い出をつづってみたいと思います。

学部時代の思い出 研究室とゼミナール

立教大学経済学部へ進学したばかりの学部1年生の頃には、先生とお会いするのはほとんど

講義の時間に限られました。例年11月に、経済学部の専門ゼミナールの募集が始まり、ゼミナールに参加するようになってから、先生とお話させていただく機会も増えました。

私が学部生であったころに記憶に残っているものがいくつかあります。ひとつは、初めて先生の研究室を訪れた時のことです。それまでは、当然のことながら大学の先生の研究室にお邪魔させていただいたことはありませんでした。研究室の両側に本棚があり、そのほとんどのスペースにびっしりと本が並べられていた光景は、当時の私にとって新鮮なものでした。それらの本は、もちろん先生のご研究に関するものが大部分を占めていましたが、数学や芸術に関する本も所々に見られ、今思えば、様々な分野に広く関心を持たれている先生を象徴しているように感じます。

私は、先生は「北海道生まれ北海道育ち」と思い込んでいましたが、先ごろ東京都生まれであることを知り、少々驚きました。とはいえ、先生が生後4か月で、当時東京都立九段高等学校で英語とドイツ語の教鞭を執っていた先生のお父様が、北海道大学文学部へ赴任されたことを契機に札幌市へ移られたということですので、実質的には「北海道一筋（道産子）」と言えるでしょうか。

札幌市では、北海道大学の関係者が比較的近い地域に居住し、先生の隣家には、当時北海道大学経済学部で「統計学」の講義を担当されていた内海庫一郎先生が住まわれていたそうで、先生のお父様と内海先生の交流をつうじた雰囲気、先生の研究者志望をはぐくむ最初の契機になったと振り返っておられました。後に先生が指導を仰ぐこととなる是永純弘先生は内海先生の門下生であり、その影響の大きさを窺い知ることができ、人の「巡り合わせ」を感じずにはいられません。また、先生のお父様の書斎には多くの本が並び、幼少のころよりそうした環境に接してこられた先生は、「研究者という職業に対する憧れ」があったとお話してくださいました。先生のお父様は、哲学の分野で多くの著書を執筆されていましたが、先生もこうしたお姿を間近に見てきたことで、人としても研究者としてもご自身の目標のひとつとされていたのだらうと思います。

学部時代に最も記憶に残っていることは、やはりゼミナール活動とゼミ合宿でしょうか。経済学部の専門ゼミナールへの参加申込と選考は11月に行われ、それに先立ってオープンゼミが設定され、私もオープンゼミを見学いたしました。4号館の別棟の2階が3階が会場だったと思います。オープンゼミでは、ゼミ生のゼミ論の中間報告が行われ、当時の2年生が報告していました。ゼミは和やかな雰囲気、ゼミ生も楽しそうに参加していたことが印象に残っています。これ以降は、徐々にオープンゼミにあわせてディベートが行われることが多くなったように思います。

ゼミナールは毎週月曜日の4・5限に、ゼミ合宿は毎年夏季休業の終わる頃、9月中旬に行われていました。ゼミナールの内容は年ごとに変わりましたが、学生が企業を選んで経営分析を行うといったことや、「経済白書」の作成や「統計学の教科書」を作成するといったグループ

ワークが行われました。先生が立教大学へ赴任された頃は、輪読を中心としたゼミナールを展開されていたそうですが、そのころから、社会見学やディベートを毎年恒例の活動として取り入れられていたそうで、私がゼミ生であった当時も、ゼミ生が楽しんで参加していました。

社会見学は、日本軽金属柏工場、朝日新聞社、読売新聞社、東京都議会、杉並清掃工場、東京証券取引所、東京地方裁判所、ANA 機体整備工場、ビール工場など、その見学先は多岐にわたりました。私が参加したのは、東京地方裁判所の見学でしたが、普段は裁判所の見学に行くことはないのです、この時のことは今でもよく覚えています。傍聴した裁判は肅々と進み、ドラマのような検察側と弁護側の激しいやりとりはありませんでしたが、自分の目で見て初めて実際の裁判の様子を知ることができたと思います。後に裁判員制度が導入されましたが、裁判傍聴の経験は必要であると感じました。東京証券取引所に関しては、「最近では立合いの様子や、クリップで止めたメモ用紙が飛び交う様子が見られなくなってしまった」と残念そうに話しておられた姿が思い出されます。こうした社会見学は先生自身が北海道大学経済学部在学中にゼミナール協議会で体験されていたことで、その経験を生かして、立教大学のゼミナールでも積極的に取り入れているとのことでしたが、我々ゼミ生にとって、貴重な体験として記憶に残っています。

社会見学と同様に、先生は毎年欠かさずディベート（時にはディベート大会）を開催されていました。私自身は経験していませんが、以前は他大学のゼミナールと合同の討論会を行ったことがあると伺っています。合同で討論会を行ったのは、横浜国立大学の岡部純一先生のゼミナールで、先生と同じく是永先生に師事した岡部先生のゼミナール出身である坂田大輔先生が本紀要に論文を執筆されていることは、先生にとっても感慨深いものでしょう。ゼミナールでのディベートは毎年複数回開催され、ゼミ合宿でもディベートが行われていました。私も、自身の担当する「基礎ゼミナール」でディベートを取り入れさせていただいております。

毎週のゼミナールは2年生と3年生が活動の中心で、2・3年生と4年生との接点はあまり多くはありませんでしたが、ゼミ合宿では4年生の卒業論文の中間報告がメニューに組み込まれていました。2・3年生にとっては、ゼミ合宿が4年生と交流できる貴重な機会でした。

このように運営されてきた先生のゼミナールからは、多くのゼミ生が育っていきました。今年の5月14日に先生の退職記念祝賀会（於：セントポールズ会館2階）が開催されましたが、一期生の方々から現役のゼミ生まで、多くの卒業生・ゼミ生が集まり盛大な会となりました。祝賀会の企画に際して、中心となって動いて下さった一期生の方々の努力によるところももちろんではありますが、やはり先生のお人柄によるところが大きかったからではないでしょうか。祝賀会に参加したゼミ生からは様々な思い出が語られましたが、ゼミ生から最も多く聞かれた先生の印象は、「お酒が好きな先生」というものでした。ゼミ卒業生からの記念品に江戸切子のグラスなどがあったことは、記憶にあたりしいところです。現在の3・4年生が最後のゼミ生となりますが、いささか寂しくも感じられます。

私はまだ専門ゼミナールを担当する職位にありませんが、私もゼミナールを担当することができるようになりましたら、自分の所属したゼミナールでの経験を生かしていきたいと思いません。

学部時代の思い出

統計学、情報処理入門と SA (Student Assistant), TA (Teaching Assistant)

私は学部1年生の時に、先生の統計学の講義を受講しました。私が初めて先生にお会いしたのがこの講義でしたが、先生は当時の私について、「前(教卓)に質問に来たことがあった。質問の内容は単純な統計計算の問題だったと思う」とおっしゃっていました。私自身は、ほとんど覚えてはいないのですが、多くの学生が受講していた講義の中でのひとつのやり取りを(初歩的な質問で印象に残ってしまったのかもしれませんが)先生が覚えていてくださったことに驚き、またうれしく思います。先生の統計学の授業スタイルは、その回の内容に関する講義を行い、その後 Excel,あるいは電卓を利用した手計算によって演習問題を解き、それを提出するというものでした。学生はリアクションペーパーに課題の回答を書いて提出しますが、提出した課題は先生が目を通して確認され、翌週返却される、というシステムでした。私が受講した当時は PC 環境のない教室であったため、すべて手計算で行いましたが、PC 環境のある教室を使用するようになってからも、このスタイルは変わりませんでした。先生は演習の時間を各回に必ず確保され、演習問題を解く間に学生からの質問に対応されていました。また、演習問題に対する解説と復習が次回の講義で必ずフォローされていたので、学生の知識の定着に重きをおいておられたのだと思います。

「経済統計ゼミナール」へ参加させていただいてからは、「情報処理入門」の SA をやってみないか」とお誘いいただきました。私はこれを貴重な機会と考え、また興味もありましたので、学部2年次より数年間、「情報処理入門」の SA (大学院経済学研究科進学後は TA) を務めさせていただきました。また、「統計学」の SA, TA を務めさせていただいたこともありました。「統計学」の SA では、先生の講義をもう一度お聞きすることができ、扱う内容に対する理解だけでなく、学生からの質問に可能な範囲で対応させていただいたことで、教える側の視点から講義を見ることができました。「情報処理入門」の SA では、技術的なサポートが中心となりました。「情報処理入門」は経済学部の1年生全員が履修する科目で、同一内容を複数のクラスで、複数の先生が担当されるというその科目の特性上、毎年異なる先生のアシスタントをすることとなりました。内容と進度は統一されていましたが、先生によって講義の進め方、説明の方法等が異なり、各先生が様々な工夫をされていたので、それらを近くで学ぶことができました。私は今年度より「情報処理入門」の講義を担当させていただいていますが、この SA としての経験をとても心強く感じています。

「情報処理入門」は、現在では共通のテキスト(『経済系のための情報活用(1),(2) Office

2013対応 』、実教出版)のもとで統一された内容が展開されていますが、この科目の内容は先生が菊地進先生とともに作り上げたものであると伺っています。先生が立教大学へ赴任された当時はPCを講義に利用できる環境は整えられておらず、1995年頃から徐々にPCの導入が進められてきたとのことです。当時、新座キャンパスにはPCが設置されていたものの、池袋キャンパスにはPCはほとんど設置されていない状況でしたが、経済学部は「新座一日利用」で新座キャンパスのPC教室を有効利用する方針をとりました。「新座一日利用」は、経済学部の一年生全員が週に一日新座キャンパスへ行き、「基礎演習」「情報処理」「体育」等の科目をそこで学ぶ、というものであったと伺っています。経済学部ではこの頃から、情報機器の利用を積極的に導入することが検討され、「情報処理入門」の立ち上げが進められたそうですが、科目の発足当初は統一されたテキストはなく、各担当教員の専門分野をそれぞれ講義するという内容であったとのことです。PCの性能や利便性も現在とは比較にはならず、講義はFD(フロッピーディスク)を学生に配布してPCを起動し、講義の終了時にこれを毎回返却させる方法で運営され、「1人の教員が2つの教室を行き来したりして、草創期は大変だった。学生も週に1日は新座キャンパスに行かなければならなかった。それに比べて今は学生もかなり楽になっているよ」と苦笑まじりに、しかし嬉しそうに語っておられました。このように先生が中心メンバーのひとりとして構築されてきた科目を今私が担当していることを思うと、感慨深く感じられるとともに、改めて身の引き締まる思いです。

「情報処理入門」の立ち上げは、先生を含めた情報教育関係の先生方が実現された大きな成果ですが、先生はその他にも様々な学内行政に携わって来られたと伺っています。主要なものを挙げさせていただくと、1999年から2001年まで経済学科長を務められた際に、北川和彦先生執行部のもとで会計ファイナンス学科の立ち上げに尽力されたこと、2003年から2005年まで経済学部長(2003年6月から同年9月は経済学部長代行)を務められ、経営学科が経営学部として独立したおりに、それに伴って経済政策学科の立ち上げに尽力されたことです。現在の経済学部は、「経済学科」、「会計ファイナンス学科」、「経済政策学科」の3学科構成ですが、そのうちの2つの学科の立ち上げに携わられたとのことで、大変なご苦労であったと思います。特に、経済学部長を務められた当時について、「とても大変だった」とおっしゃっていました。当時、経済学部長を務められていた菊地進先生がご病気のため長期入院されたため、先生が代わりに経済学部長を務められたことに加え、各学部長が輪番で担当された入試委員長も併せて引き受けることとなり、研究時間の確保が困難であったと振り返っておられました。経済学部長を務められた際には、社会学部の産業関係学科と経営学科を統合する形で経営学部が独立し、経済学部の定員の減少への対処として、経済政策学科の新設を進められたとのことです。新学科の新設に伴い、政策関係分野の教員の採用、カリキュラムの構築、文部科学省への申請と承認等に奔走され、これに合わせて経済学部の教員数と学生数の比率(SF比)を学内で平準化する活動を進め、経済学部の意見をまとめる役割を果たされたと伺っています。

大学院時代に学んだこと

私が大学院への進学を考え、先生に相談させていただいたのは2009年の3月～4月頃でした。どのようなやり取りをしたのかは、今となってはその詳細までは覚えていませんが、「研究者の世界が厳しい世界である」こと、しかしそれでも「努力（研究）を怠らなければ、道は拓ける」こと、「挑戦してみたいと思う」と、概ねこのようなコメントをいただいたと思います。私は大学院への進学を選択し、研究テーマを「物価指数論」、とりわけ「消費者物価指数論」としました。テーマは先生との相談のうえで決定いたしました。先生のご意見は概ね「物価指数に関する研究はとても重要なテーマであるにも関わらず、社会統計学の分野で近年はほとんど研究対象としている人がいない」といった内容でした。私はゼミナールの卒業論文で所得格差に関する指標を扱いましたが、指数論に関心を持っていた私に、このようなテーマを示していただいたのだと思っています。

研究指導を通じて先生から多くのことを学びました。もちろん、研究に関する技術的な面でも丁寧にご指導いただきました。先生から学んだ最も重要なことは、研究に対する姿勢です。先生の研究に対する姿勢は、先生が立教大学経済学研究科の院生紀要へ投稿された特別寄稿に端的に示されています（エッセイ「研究は広い視野で、毎日コツコツと 立教大学経済学部での25年」『立教経済学論叢』第82号、2016年3月）。この中で先生は、「予期せぬ状況に直面しても、学内業務に関わって多忙になっても、普段からコツコツと力を蓄えることさえ忘れなければ、自ずから道は拓ける。それが私の現在の偽らざる心境である。」と述べられています（前掲エッセイ、p. 7）。研究指導においても先生のこの信念が貫かれていたように思います。先生は継続的に研究成果を社会に発信していくことの重要性を主張されており、しばしば「ホームランが打てなくてもよい。ヒット、あるいは送りバントでもよいから、前に進めていくことが重要だ」と、私を含め、複数の院生に語っておられました。こうした努力を積み重ねることで、「ひとつの分野を継続して5年ほど研究すれば、その道の第一人者にもなれる」と主張されていました。「研究を毎日コツコツ」という姿勢は先生ご自身が実践され、それは先生の業績からも明らかです。近年では、経済統計学、社会統計学方法論に関する多くの論文をフォローされ、これを4冊の『社会統計学論文 ARCHIVES』にまとめられています。この資料を見ると、「毎日1本論文を読むように心掛けている」ことを実践されていることが分かります。また、これらの資料をもとに覚書を執筆されており（『社会統計学の遺産 [断章]』『立教経済学研究』第69巻第2, 4, 5号）、先生は「平然と」これをこなしているように見えました。しかし、これを実践することは本当に難しいことです。先生は是永先生への追悼文集（『Durchdenken 故是永純弘教授追悼文集』八朔社、2001年）の中で、「どうして公職で重責を果たされながら、あのように研究、教育で大きな業績を残されたのか、そのエネルギーはど

こからわいていたのか、敬服させられることばかりです。とても私にはできないことです。」と謙遜されていますが（同書、p. 187）、4冊の資料と「覚書」の執筆という、「猛然と」研究に打ち込む姿は驚くべきものでした。私がこれまで、きわめて不十分ではあるものの、多少なりとも研究成果を社会に発信することができたのは、先生の「研究に対する姿勢」のご指導のおかげです。改めて御礼申し上げますとともに、今後は少しでも先生の実践に近づくことができるように努力する所存です。

研究は毎日コツコツと、という先生のこの信念は、先生ご自身の研究業績にも如実に表れています。ここで、私自身の勉強の意味も含めて、僭越ながら先生の業績をまとめさせていただきたいと思います。

先生のご研究は多岐にわたりますが、「ロシア（ソ連）」というキーワードを抜きに語ることはできません。院生紀要への寄稿では、「私が学ぶ場として北大を選んだのは、自宅から近かったこともあるが、ロシア文学を学べる数少ない大学だったから」、また、「修士論文のテーマは（中略）もともとロシア文学を学ぼうと大学に入り（中略）ロシア語が読めたので、ソ連の統計学に研究対象を定めた」とあります（前掲エッセイ、pp. 6-7）。先生は博士課程進学後も、引き続きソ連の数理的計画法の研究に取り組み、北海道大学経済学部助手となられてからは、研究テーマを産業連関分析の批判的研究にシフトされました。その後「統計学を意識した研究に軌道を修正した」とありますが（前掲エッセイ、p. 7）、2011年頃から再びソ連の統計を扱われています。

先生は、北海道大学進学時にはすでにロシア文学への強い関心を持たれていたそうですが、先生が北海道大学へ進学する以前、高校3年生の時にロシア語を学び、ゲルツェン、チェルヌイシェフスキーなどのロシア文学研究に関心を持つようになったことが、ロシア文学へ関心を持つきっかけになったとおっしゃっていました。先生が北海道大学に在籍していたころは、「大学民主化闘争の只中にあり、講義はほとんど行われぬ状況で、自分で勉強するしかなかった」と当時の状況を話してくださいました。先生は以前、「当初は経済学への興味を感じなかったが、社会問題に深く接するなかで、経済学というものが、もっと面白いということがわかってきた。ロシア文学を専攻しても先が見えないと思い始めていたところに、是永先生が法政大学から赴任された」と、経済統計学を専攻されることになった経緯を教えてくださいました。

先生の業績は多岐にわたりますが、2003年から12年間に以下の4冊の著作をまとめられています。

1. 『統計的経済分析・経済計算の方法と課題』八朔社、2003年。
2. 『社会統計学の可能性 経済理論・行政評価・ジェンダー』法律文化社、2010年。
3. 『経済計算のための統計 バランス論と最適計画論』日本経済評論社、2012年。
4. 『ロシア統計史序説 社会統計学・数理統計学・人口調査 [女性就業分析]』晃洋書房、2015年。

先生の最初の著作は、『統計的経済分析・経済計算の方法と課題』です。「はしがき」で先生は、次のように書かれています。「本書は（中略）時代状況、学界の動向、教育環境の変化を考慮し、かつ新しい理論体系の構築は、社会統計学の遺産を肯定的に継承し、その延長上に次代に続く契機を確認する作業のなかでなされなければならないとの構想のもとに編まれた。社会統計学の現状を見ると、一方では数理統計学の体系的受容とでもいうべき懸念される動向があり、他方ではモラル・サイエンスである経済学に基礎をもたない統計学が横行している。これらの動向と一線を描き、社会統計学の進むべき道を確認する著者の学問的営為の産物が本書である」と。

著作の主要な内容は、経済統計、経済指標を用いた経済分析、計画策定、政策立案のための統計計算、経済計算の方法論的検討です。ここで先生が扱われた問題は、先生の若いころからの研究テーマであった産業連関分析の意義と限界、また産業連関分析を含む数理的計画法の方法論の考察、さらには国民経済計算体系（SNA）の方法論的基礎の批判的検討です。また、泉弘志先生（大阪経済大学名誉教授）による価値レベルの剰余価値率計算（泉方式）の意義と問題点とが解明されています。泉先生について、先生が話されていたことがあります。先生は北海道大学の研究助手だったときに、ハンガリーのヘーヴィス（バラトン湖畔）で開催された「第3回投入 産出技法ハンガリー会議」（1981年11月）で報告されています（その報告内容は、*Proceedings of the Third Hungarian Conference on Input Output Techniques, Statistical Publishing House, Budapest, 1982*に収められています）。この会議には剰余価値率計算でその後論争の相手であった泉先生も参加されていたとのこと。それ以来、先生は泉先生と親しく学問的交流を続けているとのこと。

その他、この著作では民主的計画化のマクロ計量モデルの特徴と問題点の解明、ソ連で展開された部門連関バランス、カントロヴィッチの最適計画法における「客観的必然的評価」の検討が行われています。さらに、国民経済計算体系（93SNA）における女性労働の位置づけの評価を行っておられます。

『社会統計学の可能性 経済理論・行政評価・ジェンダー』は、サブタイトルにあるように、経済理論、行政評価、ジェンダー問題と社会統計学との関係について論じておられます。経済理論の部分に関しては、変容する情報環境のなかでの統計学の課題を追求し、その問題点の解明に取り組み、具体的には、ILOが刊行した『消費者物価指数マニュアル・理論と実践（*Consumer Price Index: Theory and Practice*, 2004）』を取り上げ、価格指数論の公理論的アプローチに対する疑問を呈示しておられます。

先生はしばしば経済統計学における「数理統計学の体系的受容」に危惧を示されていましたが、これは大学院生時代からの指導教授であった是永先生の「反骨の統計学」の精神を受け継いでいるようです。地方自治体の行政評価に関しても同じスタンスをもっておられました。行政評価は、1990年代半ば以降に始まる地方自治体での総合計画に位置づけられた評価活動のこ

とをさします。先生は菊地進先生がリーダーであった科研プロジェクトに加わり、全国の自治体の中・長期計画の策定や評価に統計がどのように活用されているかの聞き取り調査を長くされていました。先生は、このプロジェクトについて「新しくいろいろと分かったことがあり、とても面白かったけれども、当時の（先生のご）研究の流れは政府統計（産業連関分析）批判にあったから、他方で若干のもどかしさがあった」と回顧されていました。

ジェンダー統計論の部分では、この種の統計の黎明期の諸問題、とくに女性の経済活動人口の指標化にかかわる議論の紹介と検討を行っておられます。関連してOECDが開発した性別隔離指数の特徴と問題点を示され、国勢調査を利用してこの指数の試算を行い、その結果を分析されています。これは、先生が前任校であった北海学園大学で教鞭を執られていたころのご研究がベースとなっていますが、当時の、男女雇用期間均等法が施行されたころの成果です。共働き世帯が増加し、女性労働のあり方等が問題となっていたことに加えて、法政大学の伊藤陽一先生から先生へお声がかかり、国連の女性に関する統計の動向を追う研究を進められました。先生の奥様が公務員として勤められたこともあり、先生にとって身近なテーマであったことも、ジェンダー統計に取り組みされた理由のひとつであったようです。

『経済計算のための統計 バランス論と最適計画論』は、ソ連で1917年革命後に作成された世界で最初の経済計算体系である「ソ連邦1923/24年国民経済バランス」とそれ以降の国民経済バランスの歴史的展開を核としています。1926年に公表されたこのバランスの原典にあたって、原理的な考察をされています。この論文は、先生が大学院生時代に精力的に翻訳を行ってまとめて書き溜めていた成果を、全編改稿して完成したものとうかがっています。

この事情を先生は「あとがき」で次のように書かれています。「想えば本書に納めた論稿のテーマは、わたしが統計研究者としての道を歩む決意をしたときに、指導教授との相談の過程でその形を整え、定められたものである。当時、かなりの時間と労力を割いてロシア語の文献を翻訳し、手書きの論文にまとめたが、それは公表されることもなく、研究室の書棚の眼につきにくい隅に埃をかぶったまま放置されていた。／数年前にこれらを論稿にまとめようと思いたち、旧稿を再検討したが、そのまま公にする体裁と内容と形式をともなっていないことがわかり、ここ数年かけて大幅に書き直し、一連の論稿として結実させた」と。関連して中央数理研究所のフェドレンコを中心としたグループの最適計画論の特徴と問題点を批判的に考察した論稿が収められています。ソ連ではその解体にいたる直前に数理派と目される研究者が数理モデルを使った計画論を展開し、「数学革命」(A. Zauberman)とでもいべき状況を呈していましたが、その動向に対する批判が先生の一貫した姿勢でした。

立教大学経済学部の学術出版助成（2015年度）を得て出版された著作が、『ロシア統計史序説 社会統計学・数理統計学・人口調査 [女性就業分析]』です。ソ連中央統計局の機関誌『統計通報』で、1970年代に行われた統計学の学問的性格に関する審議とベレストロイカの最中の1980年代半ばから後半にかけて繰り広げられた「応用統計学」をめぐる議論の紹介と検討

を主に扱われています。

また、この国の人口調査（日本の国勢調査に相当）を利用した女性就業者に関する分析をまとめた論稿が収められています。ソ連では、日本の社会統計学界にも少なからぬ影響を与えた統計学論争が1940年代後半から50年代前半にかけて展開されましたが、先生はこの論争の内容についても部分的に触れられ、1970年代の論争は規模こそ小さかったものの、統計学の学問的性格、体系構成などをめぐって興味深い議論がなされたので、その内容を紹介し、検討されたものです。1970年代のこの論争を紹介した日本の文献はなく、先生は社会統計学界のそうした空隙を埋めることを意図されていました。

他にペレストロイカの中で論じられた「応用統計学」をめぐる論議にも着目し、紹介されています。同書の後半には、. メレステ（. ）、. ドルジーニン（. ）、. カズロフ（. ）、. マールイー（. ）、. カジニェツ（. ）の諸見解がとりあげられています。

学会活動では、経済統計学会、日本統計学会、環太平洋産業連関分析学会、比較経済体制学会に所属され、経済統計学会では、全国運営委員（1991年4月～1995年3月、2001年4月～2004年3月）、全国理事（2006年4月～2011年3月）を務められました。経済統計学会は、先生が「年に一度、全国の研究者と交流できる一番大事な場であった」（前掲エッセイ、p. 1）と振り返っておられるように、先生の学会活動の中心でした。先生のご研究は、こうした学会での諸会員との学問的交流の成果でもあります。

不十分とは存じますが、以上のように先生のご研究の成果をまとめさせていただきました。先生は常に問題意識を研ぎすまし、広く「アンテナ」をはっておくことの重要性を説かれていましたが、先生のご研究の成果からこれを窺い知ることができます。

学術活動以外での先生

先生は、教育やご研究に熱心に取り組まれる一方で、日常生活において多様な趣味をお持ちでした。私が知りうるものに限定しても、読書はほとんど毎日欠かさず、映画鑑賞、演劇や古典芸能の鑑賞、音楽鑑賞、国内外の旅行などがあります。読書に関して驚くべきはその読書量で、多い時には年間150冊ほどを読破されたと伺っています。最近では、『社会統計学論文ARCHIVES』への取り組みに力を入れられ、また大河小説・古典（トーマス・マン「ブデンブローグ家の人々」、ダンテ「神曲」など）をお読みになっているとのことで、1年間に読破する「冊数」は減っているとのことですが、「読書量」は変わっていないのではないかと思います。先生は単に読書量が多いというだけでなく、お読みになるジャンルも多方面にわたります。私も本をお借りした経験がありますし、私がお貸したものもありました。前者で印象に残っているものはサイモン・シン／青木薫訳『フェルマーの最終定理』（新潮文庫、2006年）

でしょうか。この本は、フェルマーの最終定理 ($x^n + y^n = z^n$ において n は 2 以外の x, y, z の自然数の解を持たないという定理) を証明したアンドリュー・ワイルズの物語でした。この本に関連して先生は、「この定理を証明するために、何人もの数学者が（証明することができなかったという意味で）人生を棒に振ったいわくつきの難問を扱った物語」であるとおっしゃいました。数学者の研究について私はほとんど知識を持ち合わせていませんが、分野が異なるとはいえ、研究にはそうした一面があるということを示唆されていたのだらうと思っています。また、この定理の証明に、2 人の日本人の貢献（谷山 = 志村予想）についてもお話しいただいた記憶がございます。

映画鑑賞は先生が特にお好きな娯楽で、どちらかといえば、年代的に少し古い時代のものを好まれていました。私が学部生のころ、先生の映画好きが高じて本を出版されたことを初めて知った時には、大変驚きました。先生の研究室で一冊いただいたことを覚えています。映画だけでなく、ミュージカルや音楽の鑑賞もされ、「ゼミ生が演奏会（立教交響楽団定期演奏会）に出るといので観に行ってきた」と嬉しそうにお話されていました。大相撲の観戦もお好きでした。

先生は多くのことに関心を持たれ、それも表面的な関心ということではなく、相当に深いところまで掘り下げておられます。これらの先生のご趣味の分野でも、ご研究に対する姿勢と同様に、その成果を「コツコツ」と積み上げられています。これは、先生のブログ（社会統計学論文 ARCHIVES [人生という森の探索]）を拝見させていただくと、とてもよくわかります。先生のこうした姿勢に学び、今後私自身も実践していくことができるように、努力を積み重ねていかなければならないと、改めて感じています。

本年より助教として立教大学経済学部に着任した私は、同じ経済学部のスタッフとして仕事をすることはできず、近くで先生の姿勢を学ぶことは叶いませんでしたが、研究、教育の面で少しでも先生に近づくことができるよう日々精進したいと思います。今後ともお体に気を付けて、読書や映画鑑賞をはじめとして充実した日々をお過ごしください。また、今後ともご指導を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。